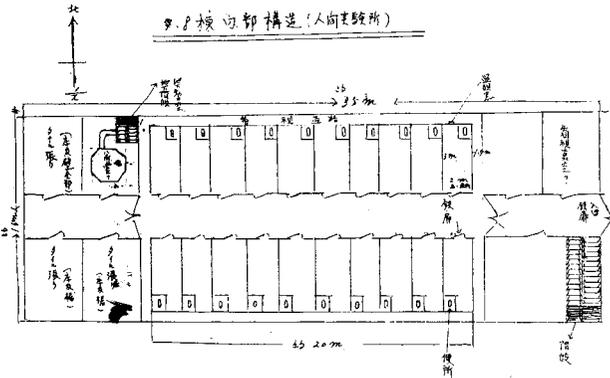




した。この特別移送のことを当時の軍隊用語で「特別移送」といった。平房の731部隊に連行されると、彼らは名前を奪われ、3桁か4桁の番号が付けられ、口号棟の中庭にある特別監獄7棟・8棟に収容された。(図2)



彼らはマルタ(丸太)と呼ばれ、特別監獄内の西側に解剖台のあるコンクリートの3部屋があり、「八角堂」で人体実験の対象とされた。医者にとっては生きたままの対象を実験できるのは大変魅力的だったようで、「今日はマルタ3本処理した」というのが隊員たちの日常会話だったという。特別監獄から脱走に成功した人は一人もいない。全員が解剖台の上の露と消えたのである。ナチス・ドイツの強制収容所のば

あいは、解放されたときユダヤ人など生存者がいたので、フランクルの『夜と霧』などの本がでたが、全員殺害された731のばあいは証言者がゼロで、戦後、医者は医学界に復帰し堅く口をつぐんだので、731部隊の秘密は長い間隠されてきた。森村誠一『悪魔の飽食』第1部が1981年に出版されるまで、敗戦から36年が経っていた。

731部隊では十数種の細菌が実験研究されたが、細菌弾として最も効率的なのは、人間にはペスト菌、軍馬など動物にたいしては炭疽菌、というのが結論だった。731独自の発明は、ペスト菌を蚤に感染させたPXである。このPXを1940年から42年にかけて中国十数地域に日本軍機から投下したり、地上で散布したりした。1992年春、イギリスのケンブリッジ大

学でジョセフ・ニーダムは私にこう語った。「ペストの生菌を空中から投下したら地上に着くまで死滅するというのが当時の世界の生物学界の常識だったので、日本軍がペスト菌を撒いて中国で被害者がでたということが当初は信じられなかった」

ペスト感染蚤であるPXは731部隊の独自の発明だったのである。PXが軍機から穀物と一緒に投下され地面に落ちると、その穀物を食べるに近づいてくる地場の鼠に

ペスト感染蚤がたかり、ペストに感染した鼠が広がっていき、ついには人間に感染する。こういう感染の方法が案出され、実行された。こうして日本が細菌兵器を世界に先駆けて開発し、実戦に使用したのである。

日本軍は1940(42)年、中国の吉林省、浙江省、湖南省、江西省でPXを散布した。奈須重雄氏が国会図書館西部で発見した金子順一論文には、表1が載っている。その表には731部隊がPXを撒いた年月日、場所、グラム数、第1次感染、第2次感染による死者数がでている。これを見ると、まず1940年6月4日に農安(吉林省)にPX5gを地上で撒いたことがわかる。そして同年10月4日に浙江省の衢県(衢州)に日本軍機からPX8kgが散布され、10月27日には寧波にPX2kgが散布されている。また翌年41年11月4日に湖南

攻撃	目標	PX (kg)	効果	
			1次	2次
1940.6.4	農安	0.005	8	607
1940.6.4~7	農安, 大賚	0.010	12	2424
1940.10.4	衢県	8.0	219	9060
1940.10.27	寧波	2.0	104	1450
1941.11.4	常德	1.6	310	2500
1942.8.19~21	広信, 広豊, 玉山	0.131	42	9210

備考：金子順一「PXノ効果略算法」『陸軍軍医学校防疫研究報告』第1部第60号, 1943年より。

表1 既往作戦効果概見表

省の常德に日本軍機からPX1.6kgが散布され、翌42年8月19日から21日にかけて、広信、広豊、玉山（江西省）にPX131gが地上で散布されている。以上の6回の攻撃により、1次感染者（罹患致死数）は合計695人（これはニータム・メモのペスト患者数699人とほぼ同じ）であるが、2次感染者は合計2万5251人、1次と2次の感染合計は2万5946人とされている。

農安でPX5gを地上で撒いた結果、農安で公式記録でも353人、実際には400人以上のペスト患者を生み出した。農安でペスト菌を地上で撒いた時、731ペスト班責任者・高橋正彦は現地についていたようで、農安でのペストの感染・拡大の状態を詳細に調べている（高橋正彦『ペスト菌論文集』慶応大学医学部所蔵）。

さらにペストは農安から60キロほど離れた新京（現在の長春）に伝播する。新京は「満州国」の首都なので、「新京1940年ペスト流行」は、紀元2600年祭典の行われる東京に「満州国」代表が新京から派遣されることもあって、統治者は神経をとがらせた。関東軍司令官・梅津美治郎の命令により、1940年10月7日に平房から「関東軍臨時ペスト防疫隊」が新京に派遣され、国防会館に防疫隊本部をおいた。

防疫本部の本部長は石井四郎であり、部

員は731部隊員を中心に別働隊まで含めると700人を越えた。農安にも新京から10月19〜20日に3本の専用列車を走らせ、千数百人の防疫隊を運んだ。しかし1カ月して、まだペストが流行しているにもかかわらず、防疫隊は新京と農安から引き上げ平房に帰還する。ペスト患者や死者から内臓をとりだしプレパラートにして平房に持ち帰り、新しいペスト菌株も、71菌株の実験データも持ち帰った。もう「防疫」の目的は終わったということ、まだペスト流行は終息していないのに、平房の731部隊は1カ月で引き上げたのである。広島にきたABC委員会《編注・米国の原爆障害調査委員会》を想起させる。この防疫活動により石井四郎の「満州国」政府内部での政治的地位は格段に高くなった。

こうして731部隊は持ち帰ったペスト菌株や高橋正彦の「農安感染報告」などを1年間かけて分析・研究し、ペスト菌散布の方法と効果に確信を持つにいたり、1年後の1941年11月4日に、湖南省の常德にPXを投下することになったのである。細菌戦の指揮者・井本熊雄の日誌には、常德のPXの投下の模様が詳しく記されている。

細菌戦の恐ろしい点、即ち日本軍にとつ

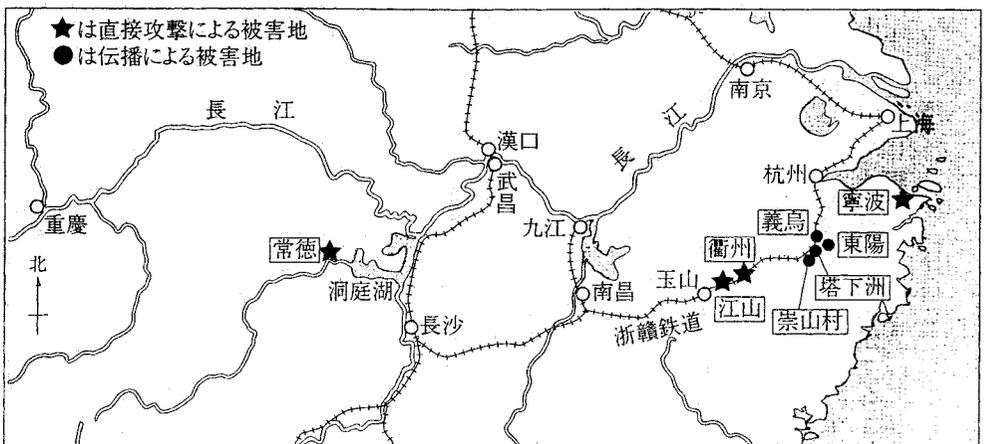


図3 中国細菌戦被害地地図

てメリットである点は、2次・3次……と感染拡大されていくことにより、日本軍の細菌散布がペスト発生源であることが判らなくなる、という点にある。ペストの流行が自然発生のようにみえてしまうのであ



空から見た 731 部隊（中央右の四角い近代的なビルが口号棟）

る。

ペストの2次・3次感染の例を挙げると、1941年11月の常德へのPX投下のばあい、市の中心に一発PXを落としただけで、市内に100名ほどの患者を生み出した。ペスト患者の死者がでると、地方当局は家族を收容所に入れ、家屋を焼却するので、

家族は死者を密かに近くに埋め、親戚などを頼って都市を離れるので、市中の感染はその周辺の村に伝播していく。常德のばあいは、近隣農村の死者は合計7000人以上を数えた。2次・3次感染である。その姓名、住所、死亡年月日は中国側の調査で明らかになり、その犠牲者名簿はすでに日本政府に提出されている。

また、1940年10月の衢県（衢州）にPXを投下した結果、衢県市で281人のペスト患者を生み出したが、周囲の村にも伝播していき、市周辺で1500人以上の死者をだした。だが、それにとどまらず、たまたま130キロほど離れた義烏から衢県に出張していた鉄道員がペストに感染し、翌日義烏の自宅に戻ると、義烏市で200人ほどのペスト患者がでた。さらに義烏市から周辺の村に同心円状に伝播していき、伝播した村の一つ、崇山村では1200人ほどの村民のうち3分の1に当たる約400人がペストで死んだ。3次・4次感染である。

細菌戦による犠牲者数の総計は、3万から60万説まである。2次・3次感染の追跡は容易ではないので、現地調査をするごとに新たに判明することが多く、まだ犠牲者の総数は確定していない。私は少なくとも

10万人以上と推定している。詳しくは松村高夫・矢野久共編著『裁判と歴史学——法廷から731細菌戦部隊を見る』（現代書館、2007年）を参照していただきたい。（つづく）

（まつむら・たかお／慶應義塾大学名誉教授）

備考

図1…中国中央档案馆（北京）所蔵。この図面は、1938〜39年に7棟と8棟を建造した建築工のひとり萩原英夫氏が、戦後撫順戦犯管理所で書いた供述書のなかの「暴露文」に付された3枚の平面図の1枚である。1991年9月9日開廷された東京高裁において、家永教科書裁判（第3次）の731部隊に関する家永側証人として法廷の証言台に立った私・松村は、「意見書」とともに萩原英夫供述書を資料として添付し裁判所に提出した。萩原資料は「暴露文」と図面3枚から成るが、本稿の図1と図2はその731部隊3枚の図面うちの2枚である。高裁判決では、南京虐殺が勝訴し、731部隊は敗訴となったが、上告した最高裁の判決では731部隊が逆転勝訴し、30数年間にわたって闘われた家永教科書訴訟が終わった。

図2…出典は図1と同じ。この図は図1の口号棟の中庭にある7棟と8棟を拡大したものである。

表1…金子順一「PXノ効果略算法」『陸軍軍医学校防疫研究報告』第1部第60号、1944年3月より。